

## 事例報告

### 披露宴は後の祭り

村 井 利 彦

#### (一) 第三の事例

この六年間で、三度の結婚式及び披露宴を経験した。初回はともかく二回三回といずれも業者まかせを厭い、いちいち積極的に関与したので、その模様の一端を直近の例を中心に報告したい。

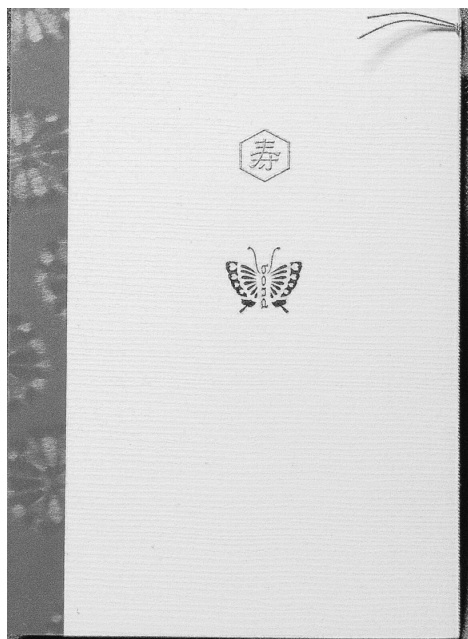
本年(平成二十一年)十月初旬に行った次女の場合は、おそらく最後の機会であり、過去二回の経験を生かし新機軸を出すことに腐心した。というのも、こちら側の親族は数が多いうえに小生と妻が一番上。毎回全く変動がない。だから、同じ構成演出ではとてももたないという事情がある。東京と広島からわざわざ大挙して京都に出てくるのだから、少しは驚かしてやる必要があるし、来るほうもなにやら期待している風でもある。

職業柄招待されることの比較的多い小生の経験からいうと、結婚式というものは、実に退屈なものである。独りで開始を待つ間の無聊。面白くない来賓挨拶を聞く我慢。何故か美味に程遠い食事の、間延びした長い時間。一面識もない隣り同士で、齒の浮く

ような会話をするいたたまれなさ。余興などあればそれはそれで気もまぎれるが、当今の若者は新郎新婦の高砂席に群がり記念写真に血道をあげるばかり。司会もプロで、葬儀社のように流暢に語って進行にょろみがない。最後にきまつてある、例のお涙頂戴、わざとらしい花嫁からの父への稚拙な手紙朗読。添削してやりた気分にならないか。しかもこれが一番の見せ場だという情けなさ。さてもこの費用対効果最悪の祭事をどうするか。

やはり、導入である。

今回の会場は平安神宮だった。観光名所であるから、早めに来て神苑でも散策するとかかなりの満足が得られる。が、それだけではないのか。もうひと押しが必要ではないか。そもそもみんな、この有名な平安神宮を本当に知っているのか。ここはつい最近できた神社にすぎないのに。というところから、思案をめぐらせることにした。が。これをどうやって告知するか。前回の、八坂神社でやった長男の時のように、情報を網羅した和綴じ本を作って全員に渡すのもよいが、二番煎じで面白くない。第一、今回は招待



客が多すぎて物理的に不可能である。

そこで小生、席次表に目を付けた。受付をすませると、必ず席次表が渡される。これがないとどこに座っていいかわからない。この必須アイテムを利用するのである。

さて、当然だが席次表は自作する。ロフトや東急ハンズにゆくと、そろいの席札ともども様々な席次表紙が並んでいる。こちららはこれと中に挟む紙を購入し、会場の席レイアウトを作り招待客の名前と関わりを一行添えて貼り付けていけばよい。やや面倒だが、これは個性が発揮しにくい事務的な作業にすぎない。

数ある中で、表紙は重ね形のものを選んだ。会場に合わせ平安王朝風でゆくことにするという安易な選択である。その紅白の重ねを見てふと考えた。これにあと一枚加えて両面印刷にしたらどうか。A4横置き中央谷折り。こうすれば、四・五頁目に来る見

開きの席次表を除いて、六ページの新聞ができるではないか。一頁五段にすればA5とはいえ相当の記事が可能だ。紅白の重ねになっている表紙と中にいれる二枚の紙色にこだわればさらに四枚の「重ね色目」で王朝美が強調できる。よい思い付きである。これにしよう。

新聞の題名は初め「重治志都新聞」であつたが最終的には「重治志都つれづれ親父新聞」という長いものに落ち着いた。韻と語調に配慮し責任の所在を明確にしたのだ。愛用している「編集長」ソフトを駆使して作り上げた「つれづれ新聞」のコンテンツを示せば以下のようになる。

「挨拶」「出会いから」「結納」「高砂や」「平安神宮」「着席表」「神苑」「リングピロー」「瓢箪」「安土と宇治」「新居」。

綺麗な写真が随所に入った賑やかな内容がパソコン上に完成した。

さて、実際に印刷の段階になって、問題が発生。肝腎の写真の乗りが悪く、大量に買ってきた、中にはさむ色とりどりの「薄様」、これが全部無駄になってしまったのだ。で、あえなく「重ね色目」を諦め、最近売り出している両面光沢の写真用紙を採用することにした。これなら印字も写真も完璧である。紙が厚いのが難点であつたが、数ヶ月前に購入した印刷機の一つが背面挿入が可能であつたので、問題は生じなかった。刷り上がった光沢紙の中央に罫で線を引き、折って金糸のゴムで纏める作業は結構楽しいものだ。出来上がった新聞の記事を参考までに掲載しよう。

## (二) つれづれ新聞

★新郎新婦挨拶 (省略) ★出会いから 二年前の八月、共通の友人の紹介で、メル友に。その時二人それぞれの胸の内は、重治「しっかりしている」(ほんとうは抜けています)。志都「おもしろくて優しい」(これは当たっています)、だそう。初デートは映画「新世紀エヴァンゲリオン」観賞でした。以後交際は、二人共通の趣味スノボーしながらにすいすいと運び、重治は志都の「笑うところ」に惹かれ、志都は重治の「逆切れしない、おっとりとした」性格が気に入っていったようです。さても、この結婚、志都が終始リードしていたらしく、晩熟重治の思いを忖度しつつと本人は言っています。が、去年の十一月には周囲を固めきってしまったと見えます。家族全員が重治君のファンになってから、最後の最後小生に狐の眼をして言いました「結婚する。反対してもする」。次の日曜日に彼はやってきました。小生、反対するどころかすっかり気に入ってしまいました。源氏物語の花散里を男にしたような、「なつかしい」感覚、これが重治君の魅力です。まあ、志都よ、お前がいくらじたばたしても仏重治の掌の上だということを知れ、と呟いたことでした。★結納 五月二四日、二人の結納式が行われました。茶野家一族が朝安土に集まり、代表が宇治に赴く。使者は新郎と新郎の叔父君・村松茂さんと義兄君・梶原剛さんの三人。挨拶もそこに沈黙の飾り付け。そして、口上。古式豊かに型が終わって、当家のリビングに結納飾りがずらりと並んだところ、壮観でした。独立の松竹梅、鶴亀に打ち出の小槌。

能装束の高砂人形はきちんと面を着けています。近江は結納の風習が根強く残る地方で、中でも安土と近江八幡はそのメッカ。流石の仕業で恐れ入りました。このあと、祝宴は、宇治一番の料理店を自負する「竹林」で。事前に事情を話したところ、店主、安土の名に緊張し頑張らせていただくとのこと。結果、料理はいつもに増して美味、特にハマグリは絶品でしたが、その料理と料理の間の長さには閉口。三時間近くかかってしまいました。これではアレキサンダー大王の食事。安土でお待ちの方々はさぞかし待ちくたびれたことでしょう。写真は、竹林。新郎の父君差し入れの金杯で乾杯の一葉。サイトー写真館の撮影です。★高砂や 高砂市高砂町の高砂神社には不思議な松がある。赤松(女松)と黒松(男松)が同じ根元から生えているのだ。この松は相生(あいおい)の松と呼ばれ、古来、夫婦和合の象徴となっている。世阿弥は、この松を謡曲にした。名作『高砂』である。赤松が高砂の女神。黒松は住吉の男神。二人は共白髪のに至るまで時空を超えて結ばれているという内容だ。世阿弥が、黒松を住吉の神としたのは『古今集』序文にある「高砂、住の江の松も、相生の様に覚え」を踏まえたためだ。かくして「高砂や この浦船に帆をあげて 月もろともに出塩の 浪の淡路の島影や 遠くなるをの沖過ぎて はや住の江に着きにけり」と結婚式で、高砂姫松が、龍宮の海である大阪湾を渡り住吉の男松に嫁入りするという部分の情景が謡われることとなったのである。結納の品々の中央に鎮座する高砂人形は、二人の晩年の姿。どちらが熊手をもつかについて、の記憶法を重治君が志都に告げていました。「お前百までわ

たしや九十九<sup>・</sup>九<sup>・</sup>九<sup>・</sup>まで」。で、翁が正解。安土の結納文化の奥深さが垣間見えた瞬間でした。小生の「婆さんはほうきに乗って空を飛ぶ」は邪道、あさはかでした。反省します。★平安神宮 今日の結果式および披露宴の会場である平安神宮の由来を述べましょう。明治二八（一八九五）年、京都で内国勸業博覧会が開催された。いうなれば万博の国内版である。絶大な人気を博し会期四カ月で一三万人の観衆であったという。そのパビリオンの目玉として大内裏の一部復活再建がなされた。およそ三分の二のスケールで応天門と大極殿が岡崎の地に出現したわけである。当時の錦絵でその盛況をしのんでほしい。おりしも日清戦争の時、財政逼迫にもかかわらず、よく事をなしたものだ。東京遷都で人口は三分の二に減り尾羽打ち枯らした京都が平安遷都千年の節目に、起死回生の事業に打って出た。日本最初の市電を走らせたのも動物園を開設したのも、この博覧会に合わせた京都人の心意気である。博覧会終了後、大内裏の施設は残り平安神宮となった。京都最初の天皇桓武と最期の天皇孝明を祭る。京都三大祭の最後を飾る時代祭はこの神宮の祭。その一〇月二日は平安遷都の日である。見るとちょっと偏ってはいますが日本史の勉強にはなります。志都は結婚するなら平安神宮と少女の頃から決めていました。よほど運命を感じていたのでしょうか。今日めでたくその宿願を果たしました。★神苑 平安神宮の裏手に展開する日本庭園・神苑は、近代の小堀遠州とも称すべき七代目小川治兵衛の傑作。彼は二十年代にかけてこの名園を完成させた。入場料を取られるが、お金を払っても一見の価値がある。入るとすぐに、空を覆ってしなだれる、

上品な八重紅の枝垂れ桜。谷崎潤一郎『細雪』の流麗な世界を堪能できる。平安の苑を進むと曲水の宴をしたくなるような遣水。この庭園の水は疏水から引いた琵琶湖の水。琵琶湖が枯れない限り途絶えることはない。二〇〇株の花菖蒲を愛でつつ中央に出ると、水蓮の池中に円柱の飛び石がくねって並ぶ。臥龍橋という。この石は豊臣秀吉が作った三条大橋と五条大橋の橋脚石を輪切りにしたもの。私は不幸の現場に居合わせたことはないが、渡りたくても六十を過ぎたら渡らぬ方が身のためだ。求めて因幡の白菟になることもあるまい。さらに進むと緑の水を満々とたたえた広い池に出る。栖鳳池という。中に楼閣をもつ屋根つきの橋が架かっている。泰平閣である。両脇がベンチになっているからわれわれは池の中央で一服できる。なんとも中国風の高雅な橋である。この橋はもと京都御所にあつたものをここに移築したものだという。道理で雅なわけだ。マディソン郡の橋を自慢する方々に見せてやりたい。今日の披露宴会場は、この栖鳳池に面しています。ところで、この池には迦陵頻伽のようなカワセミが一羽棲んでいます、かの鳥の艶姿を目にすることができた人は一生幸せになれるとか。これは京都岡崎の都市伝説。★リングピロー 結婚式新婦側の楽しみはリングピローと熊さん作り。リングピローは新婦および長男夫婦が大騒ぎ、材料を仕入れ一からつくりました。難しい総角結びと房は長男・利周の作品です。念珠店に勤めていますからお手の物。金熊さんは、不器用な母親を見るにйкаねた近所のおばさんがプロを紹介してくれたのだそうです。★瓢箪 新郎の父君の趣味は瓢箪彩色。丹精込めて栽培した巨大な瓢箪に、当地の伝



統である大津絵を描く。工房は田園の中にあり、鉄骨の二階には稲葉の風が渡り、夜を徹して仕事をしたくなるような環境でした。瓢箪はエジプト原産の人類最古の栽培植物で、荒地地をもろともせず育つ。日本に伝来したのは記録では仁徳天皇の頃。実際は源氏物語の時代でしょう。光源氏はこの花を知らず「おちかた人にも申す（あの白い花は何じゃ）」と言っています。有名な夕顔は瓢箪の花のこと。その瓢箪の花言葉は四つ。「夢」「広がり」「ふくらみ」「手におえないほどの重さ」。瓢箪は結婚と人生の植物なのです。今日の披露宴には「寄せ書き」用の巨大瓢箪が回されますので、サインとメッセージをお願致します。★安土と宇治 新郎の安土は、言わずと知れた安土桃山時代の安土です。日本が一瞬国際化した天正の頃、信長がここの安土山に城を築きました。度肝を抜く天守は、寸分の隙のない巨大な工芸品で、訪れたオランダの宣教師を驚嘆させた。天守は本能寺の変まで約三年間存在しましたが、信長とともに跡形もなく消滅しています。今、セビリア万博に出品された復元天守が、安土城天守信長の館にあります。先日拝見しましたが、三年間の存在そのものが奇蹟に思われました。このあたりから八日市に及ぶ一帯は、その昔、近江王朝の時代、紫草が群生し、鹿が遊ぶ原野で、禁猟区。天智天皇が臨幸し額田王が葉草を摘み、馬上の大海人皇子（天武

天皇）が袖を振った有名な蒲生野の現場です。新婦の宇治は、平等院や源氏物語で全国区になっていますが、その昔を言うと、ここに宇治稚郎子という文化人皇子がいて、かの仁徳天皇と皇位を譲り合ったところです。もうちょっとで日本の首府となったのに、残念ですね。平安時代は貴族たちの避寒避暑の地。住んでみると意外に瀬戸内海風の気候です。紫式部は宇治十帖で「宇治は流石に雪深い」と書いてます。彼女、宇治を知らなかったのではないかと思います。その源氏物語絵巻に披露宴の絵があります。今日の良き日を寿いで復元図をかかげおきました。★新居 二人



の新居は南草津。京都に近く大阪に遠くないこの草津界隈は、近年急速に都市化が進んだ地帯。駅前が高層マンションが林立、国道一号线や広い県道沿いには大型ショッピングモールや独創的なレストランが展開し、興味津々若者の街に変貌しています。JR南草津駅からゆっくり歩いて一五分。近江八景・矢橋帰帆の地にも近江大橋にも車で五分くらいでしょうか。是非一度お立ち寄りください。(住所省略)

この新聞は、披露宴開宴を待つ間を埋める効果を発揮した。予想通り受付を済ませ手持無沙汰の客人が実に熱心に読んだのだ。結果、事前に予習が完了してしまう結果となり、本番の進行に余裕と安心感が生まれ、披露宴のための程よい助走となった。

### (三) 瓢箪とエンドロール

会場に入り、自分の席に着くと、席札がある。その席札の裏に新郎新婦からのお礼の言葉を書くという習慣がいつのまにか生まれている。文例サンプルもあり、これをパソコンで打つ向きもあるが、ここは是非にも自分の言葉と直筆が望ましい。これを読むときこそ、新郎新婦と招待客とが個人的に結ばれる瞬間だからだ。披露宴の枕としては、案外これが肝腎要なのだと思う。今回、新郎と新婦もこれを実行した。おおむね好評だったように思う。

さて、新聞に予告した、新郎側の企画「瓢箪寄せ書き」は見せ場の一つとなった。式場に現れた瓢箪は予想以上に巨大で、一人で持つて書くのが難しい。したがって、この執筆作業は近隣の協

同作業となり、参加者の親睦の度合いを一気に深めた。瓢箪の肌は白く滑らかで、御所車が描かれた大津絵も流麗。で、必然的に寄せ書きもそれに見合ったレベルのものとなった。この参加者全員で仕上げた作品は、新郎新婦が高砂人形のような共白髪になるころには、過去をしのぶ唯一の窓となることだろう。

「夢」「広がり」「ふくらみ」「手におえないほどの重さ」。瓢箪の花言葉は結婚式に相応しい。瓢箪業者はまさに商機であり、ブライダル産業ももと瓢箪に着目し活用すべきであると考え。式の途中で、二人の履歴を見せるスライドショーも定番となっている。友人が六年前作ってくれた感激を今にした長女が、自分で担当をかってでて無難に仕上げた。特筆すべきは、さらにエンドロールまでやって見せたことだろう。これは六年前を超えている。

当日の写真、それも直前までの写真をバックに取り込み、それをスライドショー化しつつ、その上に参加者全員の肩書付きの氏名を流してゆく。映画のラスト、映画が終わり、われわれが席を立ち家路につこうとする時、画面を流れている映像、あれである。

これはかなりの力技で、協力者が必要である。見ると、座っている長女の夫の腕の中には、眠った二人の娘。同じアオザイ姿だ。長男はいえ、ところかまわず走り回り、写真を撮ってはSDカードを姉に渡し続けている。実行者の姉は、会場の片隅で留袖振り乱しノートパソコンを打ち、かつ弟の走路を指示している。なにやら物狂おしい。

しかし、彼らの奮闘の結果、披露宴のフィナーレは映画館状態

となった。招待客全員は、新婦のお涙頂戴に流されることなく、一場の夢を再見し、出演者としてのまぎれもない自己を確認して、見事な役者であったという余韻の中で会場を後にすることができたのである。

さてこのエンドロールは業者に頼むほうがよい。でないと当日の三人のように、食事も出来ず目がかすみ足と腕が痛くなる。その上、失敗で上映できぬ羽目になることも大いにある。そうなたら目も当てられないだろう。素人には危険な賭けだ。この日、長女がうまくいったのも運がよかっただけのような気がする。

#### (四) 第二の事例

個人的にいえば、二回目の結婚式ほど面白かった結婚式はない。場所は八坂神社。しかも本殿の中で式を行った。これは珍しい体験で、小生生涯の思い出である。

さらに面白かったのは、披露宴の一切合財を牛耳ったことだろう。長男が好きなようにやってよいというものだから、今回結婚した次女といっしょに司会までやったのである。新婦側の人数が少なく、こちら側の人数がほとんどであったから出来たことであったが、全く私的な結婚式を有名な八坂神社でしたということになる。

先にもちよつと触れたように、この結婚式に関するあらゆる情報を書いた小冊子を、和綴じ本で用意した。手作りであるから、表紙の選択は自由である。で、表紙は一つとして同じものがない、

というふうにした。目次を記すと、

挨拶

席次図

列席者紹介

式次第

食事献立

和風懷石吉兆

新郎ミニアルバム

新婦ミニアルバム

二人のアルバム

思い出の大学祭ピ

アに載つちやいました

た

新居紹介

八坂神社のお話

親父のつぶやき

祇園界限図

の一四項目一九ページである。

このうち、「八坂神社のお話」紹介することにする。

#### ★八坂神社のお話

七世紀中ごろ、この地に八坂氏が渡来する。八坂氏は、朝鮮半島北部にあった高麗国からやってきたいわゆる帰化人。斉明天皇から天智天皇に移行する頃のことである。その頃、半島南部では、





日本の友邦であった百済国が新羅国に圧迫され衰亡に瀕していた。日本政府は百済救援軍を組織し、女帝・斉明天皇自ら先陣に立ち玄界灘を渡る決意をする。当時皇太子で中大兄王と呼ばれていた天智天皇も天皇に従っていた。国家総動員態勢である。しかし、斉明天皇は急死し、この作戦は中止になる。

一年間喪に服し、中大兄の指揮の下、再度百済救援作戦が展開される。が、一年の猶予が新羅軍に用意万端をもたらしたとみえ、日本軍は歴史的敗北をきつする。有名な白村江の戦いである。大陸からの大量の難民が発生し、かれらは、琵琶湖周辺に移住した。敗戦後に即位した天智天皇は、その近江に都を移し、百済の夢を日本に繋いだ。さざなみの近江王朝の成立である。

八坂氏は、現在の祇園の地で勢力を張り、その氏神・スサノオを祀る神社は天智天皇の時代に感神院と名付けられ、明治まで続く。八坂神社と呼ばれるようになったのは近代になってからのことである。平安時代に、播磨国広峰より牛頭天王を移し祇園天神社が出来た。また同じ頃、薬師堂を創建、祇園寺と称した。牛頭天王は、仏教発祥の聖地・祇園精舎の守護神であるから、この地が日本仏教の聖地であるという自負があったものと思われる。

平安時代の後半になると、八坂氏は衰亡し、感神院は比叡山延暦寺の別院として山の勢力下に入る。祇園社も日吉神社の末社となった。絶対の権力者であった白河法皇をして意のままにならぬと歎かせた「賀茂川の水、双六の賽の目、山法師」の三番目、山法師が日吉神社の神輿をふりかざして朝廷に強訴した、あの神輿は、この祇園社から出撃していたのである。現在、祇園の神輿は

祇園祭の七月十七日の夕刻に、祇園社から四条のお旅所に出、そこに七日間鎮座した後、二十四日に祇園社に帰る。この壮麗な神輿巡行を見ていると、白河院の時代に還ったような気分になる。祇園祭といえば山鉾巡行ばかりが喧伝されるが、あれは町衆の主催、こちらは神社の行事。神輿巡行こそマニア必見の祇園祭なのである。

山鉾巡行の祇園祭について言おう。平安時代の初期、日本全国に「咳逆病」が猛威をふるった。その時、朝廷は、神泉苑で疫病退散の御霊会をした。これが事の起こりである。八六三年五月二十日のことだ。何故、八坂神社が関与するようになったかということになると、八坂神社が当初から祀っているスサノオと関係がある。スサノオには次のような故事があるからだ。

昔、北の海にいたスサノオは南の海の女を求めて旅に出る。日暮れて、将来の家に来、宿を借りようとする。兄の蘇民将来は極貧、弟の将来は太富豪であった。なのに弟は宿を貸





さず、兄の蘇民将来は貸した。貧乏な兄はスサノオを粟柄の敷物、粟の飯で精一杯もてなした。立ち去ったスサノオは、数年を経て再び将来の家にやってくる。返礼である。スサノオは、蘇民将来の娘に茅の輪を腰に着けるように命じ、彼女以外の者達を皆殺しにする。そして言った。「後の世に疫病が流行したら、自分は蘇民将来の子孫だと言い、茅の輪を腰に着けよ。そうすれば疫病にかかることはない」と。

『備後国風土記』にある話。伊勢のあたりでよく見かける「蘇民将来の子孫」と書かれた護符や、京都の神社で六月の末ごろ夏越の神事として行われる「茅の輪くぐり」の起源譚である。スサノオを祭る八坂神社が疫病退散の総元締めとなる必然性はここにある。なお、八坂神社が祀る牛頭天王はスサノオのことだと中世言われるようになったのも自然な流れであろう。

日本古代神話では、スサノオはアマテラスの弟で、荒ぶる神ということになっているが、本当は、八坂神社の古伝のように、大陸からやって来た神であったのではないかと推測される。

『日本書紀』から、スサノオ話をもう一つ紹介しよう。

狼藉を働き、高天原を追放されたスサノオは、母のいる根の国に赴く。途中、出雲国で、運命の出会いがある。クシイナダ姫である。姫は、ヤマタの大蛇の人身御供とされる寸前であった。ヤマタの大蛇とは、頭と尻尾がそれぞれ八つあり、背に松と柏が生えていて、全長は八つの丘と八つの谷に及ぶという化け物である。スサノオは八つの酒樽を用意させ、大蛇がそれを飲んで眠った隙をつき、八つの頭と八つの尾を切って大蛇を殺した。スサノオは

クシイナダ姫と結婚する。出雲国須賀の地に新居を建てた。その喜びの歌は、

八雲立つ 出雲八重垣 妻こめに

八重垣作る その八重垣ゑ

である。これが本朝和歌の始まりということになっている。この結婚で生まれたのが大国主神である。さてスサノオは、姫と子を出雲に残し、予定通り、母のいる根の国に去ってゆく。

現在、子の大国主を祭る出雲大社が縁結びの神様として名高いが、結婚したのは親の方だからスサノオの八坂神社の方が靈驗あらたかだと筆者などは思ったりしているわけで、ここを愚息の結婚式場とした次第である。

#### (五) 後の祭りは

この二回目の小冊子は面白い企画ではあったが、失敗だったと反省している。というのは、披露宴より面白かったからである。参加者が早めにやってきて、ロビーでこの和綴じ本を読み終わった時は、もう結婚式は終わっていたのである。やはり、予告編は予告編の分際を心得るべきなのである。調子に乗り過ぎると鼻白む結果が待っているのは世の常というものだ。

で、三度目の正直は、禁欲に終始したわけである。今思うと、案外に満足のゆける結果であったと思量している。

結婚は両家ものから個人ものになって、結婚式も多様化しているけれども、親が資金を提供するかぎり両家ものである。

金を出すのが口は出さぬ。それでよいのか。結婚式はともかく、披露宴は寄付行為や宗教行事ではない。めったにない一世一代の祭事であり政治の場でもある。世の親たちよ、結婚式を存分に活用し、人生最後の主役を張れ、と言いたい。

この日に、われらの人生と行く末、つまり死生観を片づけておかないと、片づける日は永遠にやつてこない。小生は密かに思う。この若い二人が結婚し、子供が生まれるということは、とりもなおさずわれらの再生なのだ。この祭事はそのために盛大なのであって、子の道に迷う無償の愛などでは断じてない、と。このことは若い二人には内緒の話だ。二人が何を考えようと、結婚式が終わった後は全てが後の祭りとなるからである。